

## 資料紹介

### 太田飛驒守一吉と

### 積慶念の『朝鮮日々記』

宮下良明

(会員 佐伯市西上浦)

豊後大友氏は鎌倉時代より約四〇〇年間、豊後守護職として君臨してきたが、二十二代吉統(宗麟の嫡子)は文禄二年(一五九三)朝鮮の役の失策により改易された。以後、豊後国の所領は秀吉の蔵入地(直轄領)となり、各所に秀吉の「代官」が配属された。当初大野郡を預かっていた「太田一吉」は慶長二年(一五九七)白杵城主として入城した。在城期間はわずか三年に過ぎなかったが、第二次朝鮮出兵(慶長の役)、これに先立つ領内の総検地(慶長検地)、慶長五年にはオランダ船リーフデ号の漂着、関ヶ原合戦では西軍につき白杵城を開城して敗退した。

山口玄蕃の文禄検地から三年後に実施された太田一吉

の慶長検地は「飛驒帳」と呼ばれ、現在大分県の文化財として保管されている。

文禄二年に佐伯氏が母牟礼城を去ってから毛利高政が慶長六年(一六〇二)に入封するまで、佐伯領は白杵城の管轄下にあつたと思われ、領内の庄屋文書には山口玄蕃の文禄検地や太田飛驒守の慶長検地の痕跡、また「稲葉おこし」などの記載が残されている。

ここでは、太田一吉に医僧として従軍した「積慶念」の記録した『朝鮮日々記』を紹介したい。これは白杵安養寺に所蔵されていたもので、昭和三十九年に佐伯史談会の村井強氏と羽柴弘氏によって解説され孔版印刷された。最近、同会員橋迫昭氏が活字にされたので、抜粋して紹介する。

白杵安養寺蔵 慶長寺司蔵

## 朝鮮日々記

佐伯市史談会  
発行

解説

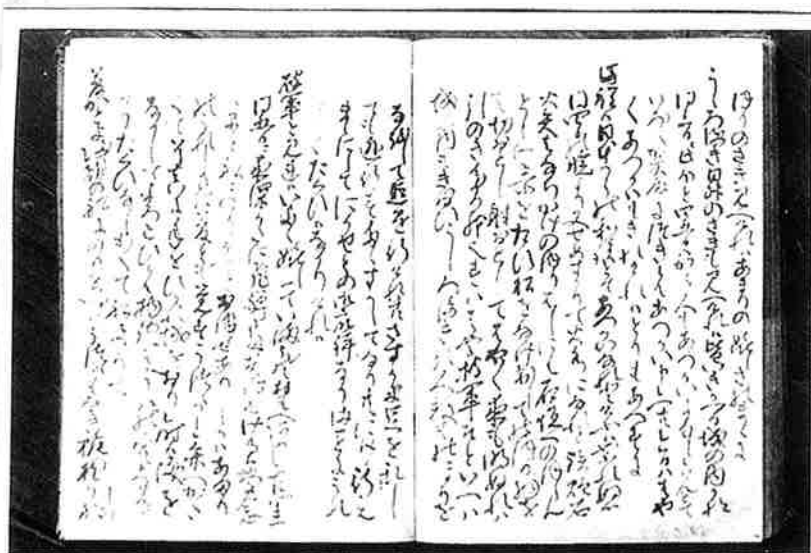
この「朝鮮日々記」は慶長二年六月（一五九七）豊臣秀吉の第二次朝鮮の役に、その武将であった時の臼杵城主太田飛騨守の命により、その従軍僧となり、将兵と共につぶさに戦陣の労苦をなめられた、安養寺（臼杵市市浜）の開基慶念の陣中日記であります。

朝鮮の役従軍記の文献としては、「立花宗茂朝鮮記」「朝鮮古文」・「清正記」・「朝鮮日々記」（本書とは別）「面高連長坊高麗日記」（以上は史籍集覧にある）――

「朝鮮記、一名大河内物語」・「島津家高麗日記」――（この二書は続群書類従にある）一の数種があげられるが、本書はかくれた朝鮮日記であり、従軍僧の体験記として極めてユニークな価値をもつものであります。

僧慶念については、この日記の最後に、その経歴をのせてありますので御覧下さい。従軍僧としての本務は傷病兵の手当看護を含んでいたようですが、敬服すべきその信仰態度は、この手記全篇をつらぬいて、本書の特色をなしています。

（後略）



(表紙)

安養寺住職

六十二才

慶

念

伴僧 了真

一僕 又市郎

慶長貳年六月廿四日ヨリ

日々記

(本文)

抑そもそも此たび太田飛驒こちうらいさま高麗へ召つれらるべきよし承りしかば、さても不思議なる御事おんごしかな哉。この老躰は出陣などは夢にさへも知らず、其上ならい習なき旅の事は中々難儀に候也。御養生一篇ならば若き御旁々おんかたがたをもめしつれ候へかしと申上候へ共、是非共御供候おともいてはいかがとの御掟ごじようなれば迷惑至極の躰なり。殊更此高麗は寒国となほいい、波渡なみわたりをしのぎ万里の海路なれば、二たびと帰らん事は不定なり。老身のためにハ前代未聞なる事なれば、いざやはじめて日記とやらんをつくり、こしおれの狂歌をつづり、後の世の笑草わらいくさのたね共ならざらんやとおもひ候也。一覽の後は火中へなげすて有あるべし。

六月廿四日に御出船にてさかの関せきに御船付、其暮に橋本傳十郎に御振舞なされ候て、とかく候へば土佐殿御船付頓て御参会有りしなりけるをとりあへず、  
◎白杵来て関の泊の夕暮に  
はや土佐殿と参会をめす

さるほどに子にて候八郎はをくり船に乗おくれ、さかの関までは来らずなり。さても今すこし今生にて名残語申し候はん物をとしのびの涙せきあへずなげき侍りしに、ふしぎに夜半時分に来る。おもひのままにいとまごひをし侍りしなれば今は心やすくおもひ、やがて其あかつきに上上せきより船にのらんとて、道すがら手に手を取りあひて、船本までたがいにうちつれ出しときに、あまりの名残おしきのままにかやうに詠じ船二のりて出行けり。

◎二たびと帰らん事もまたかたし

いまを別の老の身ぞうき

さても関崎を過てうらべ地にかかりし時に後を見送りければ、白杵のかたは遠くして霞かかり、あまりのお

もひに

◎残しおく其たらちねの妻や子の

なげきを思う風ぞ身にしむ

(中略)

八月三日から島色々の名所を過て赤国の川口に入見れば、はてもなき大河也。数千艘のおしならびでも、いづかたへ行共なき所也。はてしなればかやうに、

◎おとにきくこしやうの湊これ是かとよ

五里も十里も入てこそゆけ

同四日 はやばや船より我も人もおとらじ負じとて、物を取り人を殺し奪あへる躰、なかなか目もあてられぬ気色也。

◎咎もなき人の財宝とらんとて

雲霞のごとく立さわぐ躰

同五日 家々を焼立煙の立を見て我が身の上におもひやられて、

◎赤国といへ共やけて立煙

黒くのぼるハほむらとぞ見る

同六日 野も山も城は申におよばず、皆々焼たて、人をうちきり、くさり竹の筒にてくびをしバリ、おやハ子を歎なげき、子は親をたづね、あわれなる躰はじめてみ侍る也。

◎野も山も焼たてに呼ぶ武者の声

さながら修羅の阡あまた成けり

同七日 いろいろ人ごとのらんぼうの物を見てほしくおもひて我心ながらつたなく思ひ、かやうにては往生もいかがと思ひ侍りて、

◎恥しや見る物ごとにはしがりて

心すまざるもうねんの身や

同日 あまりにあまりに我心をかへり見てつたなくおもひ、され共罪業深重もおもからず散乱散ほう放いづつてられぬ御誓おちかいなれば也。

◎おそらくはみだの誓ちかひをたのまずバ

此この悪心はたれかすくわん根

同八日 高麗人の子をバからめとり、おやをばうちき

り、二たびとみせず其の歎ハさながら獄卒の責成りとも。  
也。

◎あわれなりしてふの別是かとよ

親子の歎見るにつけても

(中略)

慶長三年正月一日 さても無念の朔日かなや。かやうのうらめしき正月にハ六十三なり候へ共、たづねてもおぼへずなりけれバ、

◎あらたまる年の始のけふかとよ

六十三にならべてもなし

同二日 うしろまき(投票のこと)のあるとハきこへ候へども、いまだ其所詮もなし。いかがとおもひけるに、未明よりのぼりのさき見へけれバ、あまりの嬉しさのままに、

◎うしろまき昇(のぼり)のさきも見へけれバ

皆いきかへる城の内かな

同三日 此ほど四五日ハから人もあつかいになし候ハんとて、いろいろ加藤殿につき候てあつかい申候へ共、今日ハはやばやあつかいもきれけれバとりもあへず

に、

◎此程ハ日本からの和談とて

あつかいなれどけふ(今日)ハやぶれぬ

同四日の暁より又せめすがりて火水になれと鉄砲石火矢はなちかけ、のぼり(空り橋)ばしにて石垣へのぼらんとしける所を、たひ松をなげ出してのぼる物をば切おとし射おとして、はやばや夜も明ぬれバ、引のきたる躰なり。すハはや援軍ぞといへば城の内もきおひ、うしろまきの人數ものぼりをなして追懸行けれ共、さすがに足を乱しても逃行ず、ただすかしてなり共にげ行けばままにしてにがせとの御衆評なり。まことにうれしさたくひハなかりけれバ、

◎破軍と見ればいよいよ嬉しくて

いまこそおもへありし古ル里

同五日 夜深かたに飛驒さまおほせけるに、慶念ハ早々船にのり候へとおほせありしかバ、あまりのうれしさに夢とも覺ずうつつかと弁(わか)へがたくて、了真に手をひかれ城をおりし時ハ涙をながしてよろこび候て、

物語もうハの空なる事たぐひなし。かくて船にのりて、  
◎夢かよ帰朝の船にのりを得て

うつともなき梶枕して

◎此程の苦みさらにつきがたし

おもひ出せばこころさむやな

(中略)

正月卅日 下の関を夜の明がたに船出してよもすがら

波にゆられ、夜ふねにのりけるなり。

◎夜と友にあかまが関をこぎ出でて

波にただよふ梶枕かな

二月朔日 さがのせきにつきしかバ、渡海の時にはあ  
ひかハりて、万のうれしさハたとへんかたもなし。

◎嬉しさハ何にたとへんから衣

かさねてきぬる此浦にして

同二日 白柁に帰帆申候て、ねがひのまま孫子共見参  
申、よろこび申斗なくおもひ候也。まことにまことに  
に浦島太郎が七世の孫子にあひしたためしも、今身の上  
に知られ候なり。

◎是かよ七世の孫にあひぬるも

今身の上におもひ出けん

かやうに思ひ候事ハぎおんの洲崎まで各々孫共をめし  
つれ来るをみて、はやうれしさのあまりにかやうに詠  
じ候也。さてまたわが座につきしかバまづまづ佛前に  
参候て、本意をとげ申たる事哉。かかる宿縁にもあ  
ひたてまつりたる身かな。いよいよ道場の御造作も結  
構出来申候へバ、いやましの歎喜のよろこびうちお  
きがたく御座候。

◎よろこびハうさをおもひし程もなし

我身ながらもおろかなるかな

慶長二年六月廿四日ニ渡海仕て

同 三年二月 二日ニ帰朝候也

安養寺 開基 慶念 狂歌也

◎目もかすみ筆も叶わぬ身なれども  
しとふむかしを写してぞおく